博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	吉野　伸哉
論　文　題　目	日本における Big Five パーソナリティの地域差とその背景に関する検討

審査要旨

本学位請求論文は，近年海外において盛んに研究されている，一国内の心理特性の地域差およびその差がどのような社会的指標に関連するのかという問題を，日本に適用することを試みたものである。心理学において，国や大きな単位の複数の地域において，人々の心理学的特性の差異を検討し，広く文化差として議論することはよく行われてきた。一方で，一国内の心理学的特性の地域差を検討することは，一定の条件下で外的環境や社会生態的な要因との関連をより詳細に検討することになり，心理特性や生活スタイルの解釈にも一定の寄与をもたらすことが期待される。

特に本論文では，パーソナリティと呼ばれる構成概念に注目している。パーソナリティは，時間と状況を超えてある程度一貫した心理学的な個人差を表す概念であり，近年では Big Five パーソナリティという枠組み（外向性，神経症傾向，開放性，協調性，勤勉性）が世界的な研究に対象となっている。本論文は，第 1 にパーソナリティのような個人差特性が実際に一国内で安定した差異が見られるのかを検討すること，第 2 にどのような社会生態的変数がその差異に関連するのかを検討すること，そして第 3 に一国内におけるパーソナリティの差異がどのような結果（アウトカム）に影響するのかを検討することを目的としている。

本学位請求論文は，以下の 12 の章で構成される。第 1 章では心理学における地域差研究の歴史が概観され，背後にあるプロセスが論じられた。心理学的な地域の差異は，文化や風土として捉えられてきた。また調査を背景とした県民性の報告なども存在するが，調査の内容が散発的であり，理論的な集約が難しい状況にある。本研究では心理学で研究の蓄積が行われているパーソナリティ特性に注目することで，理論的な統一を目指すものである。第 2 章ではパーソナリティ特性，特に Big Five パーソナリティに注目し，比較的広い国や文化圏による差異と一国内における差異を論じる意義が説明された。国外では近年のオンライン調査の大規模化などを背景として多くの研究知見が積み重ねられているが，国内における同種の研究知見は不足していること，またパーソナリティの一国内の差異についてさらに検討すべき問題が論じられた。第 3 章では，日本における地域差研究の歴史が概観され，風土や県民性研究から Big Five パーソナリティ特性の地域差が示唆された。日本においてパーソナリティ特性の安定的に地域差を検討した研究はほとんど見受けられず，本研究の独自性が主張された。第 4 章では，パーソナリティ特性の地域差がどのような要因によって形成される可能性があるのかが論じられた。要因として，生態的影響，社会的影響，選択的移住という 3 つが取り上げられ，それぞれの影響要因について先行研究を参照しながら詳細にその可能性が述べられた。第 5 章では，パーソナリティ特性の地域差がどのような社会経済的な要因に関連する可能性があるのかが論じられ，パーソナリティの地域差がもたらす結果がどのような範囲に及ぶのかが論じられた。また人ー環境適合仮説について触れられ，パーソナリティ特性と結果との結びつきに対して，居住地域の周辺環境が調整変数として機能する可能性が示されている。第 6 章では本論文において行われる実証研究の目的と概要が説明された。本論文では複数の大規模なデータセットが分析の対象とされており，どの研究においてどのデータが用いられたのか，どのような心理尺度が用いられたのかについても，この章において整理が行われている。

氏名 吉野 伸哉

第 7 章以降は，大規模なデータセットを利用した実証的な研究が示されている。第 7 章では，複数のデータセットを用いて，実際に都道府県レベルで Big Five パーソナリティ特性の地域差が生じるかどうかが検討された。空間統計の手法を用いて，都道府県別の Big Five パーソナリティの地域差が示された。ただし，見出された差は決して大きなものではないという点も強調されている。第 8 章では，居住地域の日照時間や自然災害履歴，徒歩で生活を営むことができる程度を指標化したウォーカビリティなどの要因に注目し，Big Five パーソナリティの地域差に関連する要因が検討された。日照時間の短さは神経症傾向の高さに関連しており，自然災害の発生や自己認識が神経症傾向の高さや外向性の低さに関連すること，そしてウォーカビリティの高い地域の居住が外向性に関連することも報告されている。第 9 章では，転居願望や実際の転居経験など選択的移住に注目し，Big Five パーソナリティとの関連が検討された。転居を希望することや実際の転居経験は，開放的なパーソナリティ特性に関連しており，この結果は海外での研究知見と共通している。第 10 章では，各地域における政治・経済・社会に関連する各種指標や外国人居住者に対する寛容性と，パーソナリティ特性の地域差との関連が検討された。外向性が経済指標に関連し，開放性の低さが保守的な政治的志向性に関連するなど，理論とも一致する関連が報告されている。また，外国人居住者の割合が高い地域に居住している場合に，勤勉性が高いと，外国人居住者に体知る寛容性が低くなると言う結果も報告されている。第 11 章では，本論文で検討された多岐にわたる結果がまとめられ，Big Five パーソナリティそれぞれが特徴的な社会的要因に結びつく可能性が論じられた。そして第 12 章では，一連の研究における限界と今後の展望が示された。

公開審査会は 2022 年 8 月 24 日（水）午前 10 時より12時10分まで，Zoom によるオンラインで行われた。参加者は発表者，主査，副査 2 名，聴講者 8 名の計 12 名であった。審査会では吉野氏から学位請求論文の概要が発表され，その後，活発な議論が行われた。特に背景に存在するプロセス，分析手法，日本独自のコンテクストの問題などについて質疑応答が行われ，今後の研究への課題が明確化された。

公開審査会終了後，Zoom 上で主査と副査による審査委員会が開催された。博士学位請求論文および公開審査会の発表内容について議論を行い，その内容が申請者の博士学位取得にふさわしいものであることが確認された。

以上の論文内容および審査の結果を踏まえた上で，本論文は博士（文学）早稲田大学の学位を授与するに値するものと判断する。

公開審査会開催日	2022 年 8 月 24 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小塩 真司	発達心理学，パーソナリティ心理学	博士（名古屋大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宮田 裕光	身体心理学，生理心理学，心身論	博士（京都大学）
審査委員	京都大学人と社会の未来研究院・教授	内田由紀子	文化心理学，社会心理学	博士（京都大学）